寺子屋教室の実践と子どもの教育について

高崎市　小川広平

１. はじめに

高崎経済大学には経済学部と地域政策学部の 2 つの学部がある。私の所属する地域政策学部は、その名の通り行政の視点・まちづくりの視点・観光の視点など様々な視点からどのように地域を活性化していくのかということを扱う全国でも珍しい学部である。

今回はその学部で学ぶ私が数名の学生とともに作り上げた、平成 21 年の８月の夏休みに高崎市北小学校の児童を対象に実施した、『夏休み寺子屋教室』の取り組みについて紹介したい。

２. 寺子屋の実践

ⅰ)なぜこの活動を行ったのか。

この企画を考えた背景には私の経験がある。私の家庭は経済的にあまり豊かではなかった。小学校から中学校に上がると、クラスのほとんどの生徒が、高校入試に備え塾に通うようになった。暗中模索の状況でどのように勉強すればよいのかもわからずにただ不安に駆られながら勉強をしていた。

経済状況が悪化の一途をたどる中、経済格差と学力格差がイコールの関係で結ばれる社会になってきている。そんな中、塾に行けず勉強に対して不安を持っている子どもは増えていると思われる。大学入学時、私は中学のときに感じていた不安と同じような不安を抱えている子どもを地域の学生が手助けすることはできないかと思い、この企画を思いつき実施に至った。

ⅱ)企画段階

“地域の子ども達のために何かできないか”という意識だけで走り始めたこの企画であったが、どのように企画運営していけばよいのかわからなかった。とりあえず夏休みに向けて実施の予定を立てていくことしかできない。そんな中、高崎市社会福祉協議会に相談してみることにした。相談の内容は夏休みに「どこでどのように行うか・対象者はどうするか・資本金のない私達にどのような企画運営ができるのであろうか」ということであった。担当の伊藤さんは親切に対応してくれ、高崎市総合福祉センターのボランティアルームで行うことをすすめてくれた。支出はボランティア保険と消耗品などであり、スタッフが 1 人 1000 円持ち寄りにすることで解決した。また、保険代・印刷代・消耗品費として参加費を 1 人 1 日 100 円とした。対象は高崎市総合福祉センターの学区である高崎市北小学校 4・5・6 年生の児童に決めた。

残った課題は内容とＰＲ方法である。その頃何人かの人が集まりはじめ、企画に具体性が増してきた。内容は夏休みの宿題のサポートとした。夏休みの宿題といっても計算ドリル・ポスター・絵画・自由研究等、様々である。そのような課題に児童が取り組める環境を整えることも重要であると考え、様々な分野の大学に通っている大学生にも声をかけた。ＰＲ方法は伊藤さんが私達と共に北小学校に直接出向き交渉してくれることになった。

さて企画が完成し、チラシの原案を持って北小学校に伺ったが教頭先生との話し合いの中で問題が浮上した。Ｅメールでの申し込み確認を行おうと考えていたが、今年から始めた見ず知らずのボランティア団体への信頼性の低さから断られてしまった。また、公共機関をバックにつけてくれないかという依頼も受けた。最後に指摘されたのが、セクハラの問題であった。

参加人数を把握したかったのだが、申し込み不要とし、参加自由とした。また、社会福祉協議会の後援依頼も申請した。その後、児童の募集を行った。企画実施の一週間前にスタッフを対象に事前説明会を開き、注意事項の確認を行った。そしてついに当日を迎えることとなる。

↑　寺子屋教室全体の様子

分野ごとに机を分けて学習

ⅲ)実施

実施日程は平成 21 年８月の月曜日・木曜日の週 2 回で計 8 回、9：00 から 12：00 までの午前のみ活動を行った。内容は、計算ドリル・漢字ドリルといったドリル問題をはじめ、絵・ポスター、習字、自由研究の相談に至るまで対応した。初日の朝は不安であった。参加者 0 人という不安と参加者が多すぎて対応しきれないのではないかという淡い期待が入り混じっていた。児童を総合福祉センターの入り口で待っているとひと回り小さいマウンテンバイクに乗りヘルメットをかぶった児童が 10 名ほど集まってきた。なんともいえないうれしい気持ちが湧き上がってきた。全日程 8 日間はあっという間に過ぎた。漢字ドリルの課題は漢字の意味から連想させながら解かせ、社会科の県名のワークでは J リーグのチーム名やプロ野球の球団名も使った。ポスターや絵画を描くときは、実際に外に児童を連れ出し、木を観察させながら描かせた。自由研究では研究手順を説明した後に、実際にブーメランを飛ばす実験を行うことや、工場に直接資料請求の電話をかけることもした。また総合福祉センター近隣のスーパーに直接出向き果物の糖度を計るという実験も行った。最終日にはファイナンシャルプランナーの方にご協力をお願いし、擬似通貨を用いたマネーゲーム(株式の仕組みを学ぶゲーム)を行った。参加者は全日程の 8 日間を通して延 71 名となり、大盛況のうちに幕を閉じた。

ⅳ)実践から浮かび上がった問題点

○こなすことはできるが、考えることが苦手な児童

算数の宿題を見て感じたことは、宿題が作業になっているということである。確かに反復練習する上でとき方・パターンを覚えていることは大切ではあるが、宿題を終わりにすることだけに集中してしまい、ただ計算するだけでよいという意識で取り組んでいるようだった。間違ったところなどは見直しをしない、しまいには答えを見て写す児童の姿が見受けられた。勉強全般において、自分の頭で考えなくてはならない勉強を非常に苦手と感じている児童が多いということを感じた。つまり、問題をこなすことはできるが、自分で考えて見直す、読み解く、自分の意見を述べる、とい

ったことを多くの児童は苦手としているのではないかと感じた。

○インターネットの弊害

絵、ポスター、自由研究の課題では、インターネットの弊害が顕著に現れているように思った。例えばポスターの課題では、木を描こうとした児童に「木ってどんなの？」と問いかけると、1歩ボランティアルームの外に出れば、直接観察できるのにも関わらず、それを観察しようとはせず、インターネットで調べようとし、自由研究での本物を見る、実施して確かめることを避け、インターネットの情報に頼ろうとする児童の姿が見受けられた。

○正解を求めようとする児童

絵では、虫の絵を描きたいという児童が図鑑やイラストをそのまま写そうとしていたのが印象的であった。そして周りから変だと言われることに対し敏感になっているようだった。ポスターの課題を行おうとする児童はテレビの影響、また様々なところに掲示されているポスターと似たようなデザインにしようとする児童がいた。そして、自由研究でも同様のことが言えた。予想した数値と実際の実験結果としてあらわれた数値が大きく外れていた場合にはなるべく実際の数値に合わせようとする児童の姿が印象的であった。正解を求めるあまり、個人らしさ・自由研究の味というものを殺しているように思った。

↑自由研究「果物の糖度」
児童と近隣のスーパーに出向き計測している様子

○自発的な児童が少ないこと

児童はなかなか自分から何かを解決しようとはせず、「大学生が何かを提案してくれる」といったように児童は大学生が教えるのを待っているようであった。特に自由研究ではなかなか進まず、実験方法から何から何まで大学生が提供してくれるのを待っているような印象を受けた。しかし、その要望に応えるのでは全く寺子屋の意味をなさないと感じ、児童に考えさせるように心がけた。

その一方で、児童から「見て！」といわれているようにも感じた。自発的に動くのが苦手というのではなくスタッフに自分のやっていることを見てもらいたいがためにそのようなそぶりを見せているようにも感じた。

v)このような状況を踏まえ何をすべきか

まず子ども達に“本物”を見せる機会を設ける必要があるということである。理論、公式など机の上で行うことのできることではなく、実際に体験しなければ得ることのできないもの、実際に見なくてはわからないものを、“体験でき、見ることができる機会”を設けることが大切なのではな

いかと思う。そのようなものは身近に存在すると思う。例えば、高崎では交通インフラが整っていない。市内の子ども達の移動手段は自転車か親の車での送迎が主である。私も高崎に 20 年住んでいるが、最近ようやく電車に乗り、乗換えができるようになったという状況である。高崎の子ども達にとって電車は未知の乗り物であると思う。そのような子どもに電車に乗る機会を設けることもまたひとつの体験になるであろう。何の変哲も無い田畑・街中にある小さな老舗・地域にある大小様々な工場、地域に残る城跡・古墳・よくわからない石碑などの“地域資源＝本物”は絶好の“発見・体験の場”になりえる。また、それらを伝えるその道のプロの存在も大きな役割を担うと思う。

また、大自然の中で思いきり遊ぶ機会を設けるのもまた１つの経験となるであろう。私は NPO 法人じゃんけんぽんの自然体験部わらべの谷の活動にスタッフとして今年の 6 月頃からお世話になっている。そこでは第 1 日曜日、第 2 土日曜日の月 2 回ほどキャンプを行っている。第 1 週目は日帰りキャンプであり、親子の絆を深めることを第 2 週目の 1 泊 2 日のキャンプでは子どもリーダーの育成・自発的な行動を身につけることを目的としている。「楽しいから一歩踏み込んで意味のある空間へ」「われわれの郷土は我々が作らなくてはならない」常務理事の笛田さんはこのように語ってくれた。そこには子ども達が遊ぶために作られた道具・遊び場は何も無い。ただ、森を切り開いた谷間にテントが立っているだけである。しかしそこで見せる子どもの目は輝いて見える。川に入り石をひっくり返して虫を探したり・枝に草を結びつけて釣竿を作って遊んだり・きのこを探したり・カブトムシを捕まえたり…。子ども達はそれぞれ創造の世界を張り巡らせて彼らの世界を作っている。

↑　最終日　マネーゲーム

擬似通貨を使い株式の仕組みについて学ぶ

子どもは以上のような活動を通じ、発想力・想像力・応用力・問題解決力を培っていくのではないだろうか。そして、我々は今後寺子屋教室の活動を行う中でその規模が小さなものになるかもしれないがそのような機会を設けていきたい。

３. 最後に

私はこのような地域に密着した活動の規模を拡大化させることに限界があると感じている。なぜならば、こども一人ひとりの行動、性格をみることが困難になってしまうのではないかと考えるからである。

この文章が“我々のような教育分野の市民活動・学生活動をより活性化する”ことそして“「彼らにもできたのだから、私たちにもできるはずだ」と新たな教育分野事業を立ち上げる人たちの起爆剤になること”を望みたい。そして私たちの活動も含め、このような活動が地域の子ども達により良い影響を与える活動になることを切に願いたい。